

清須における河川跡の研究

● 蔭山誠一・鈴木正貴

本論は、愛知県清須における旧河川の変遷について、これまでの発掘調査において確認された流路跡の検討に加え、明治17年作成の愛知県公文書館所蔵『地籍字分全図』から古河川跡の復元を試みた。その結果、①弥生時代から流れる朝日遺跡の谷Aを中心とする河川群から、②古墳時代後期から古代に流れたと思われる朝日西遺跡の東端部を流れる旧河川、③古代～戦国時代に美濃街道の東を南北に流れる旧河川、④江戸時代前期の名古屋市蓬左文庫所蔵『春日井郡清須村古城図絵』に描かれた旧五条川、そして⑤18世紀末の瀬替え以後の現五条川の5段階に河川が変遷することが明らかになった。

1. はじめに

愛知県清須市には、江戸時代初頭まで尾張の中心部として城下町があり、その中心部には現在も市域を流れる五条川が流れていた。この五条川の姿は、江戸時代前期に描かれた名古屋市蓬左文庫所蔵『春日井郡清須村古城図絵』（以下『古城図絵』と略す）にも描かれており、18世紀末に行われた瀬替え以前の姿が確認される。近年実施されてきた清洲城下町遺跡の発掘調査によっても、江戸時代以前の旧河跡と考えられる遺構が複数の地点において確認されており、遺跡の変遷とも関連して重要な成果と思われる。本論では、このような遺跡における歴史展開がおこる背景として、旧五条川の変遷について着目し、明治17年作成の地籍図を利用した解析、そして考古学的資料を通じた遺跡の分析と当地域に残る文献資料の分析を総合して明らかにしていきたい。

なお、本論における地名の表記は、近年の市町村合併に伴う変更された地名ではなく、西暦2000年（平成12年）時点の市町村名を使用し、明治17年作成の地籍図の解析に関する部分において、地籍図中に記載された旧村名を地域名として表記する。

2. 清須周辺の地籍図の解析

(1) 方法

ここでは明治17年作成の愛知県公文書館所蔵『地籍字分全図』（以下『地籍図』と略す）を定本として用いる。これまでの海部郡北東部（中・近世研究部会2004）と海部郡甚目寺町（現あま市）・西春日井郡新川町（現清須市）・西春日井郡西枇杷島町（現清須市）（加藤2006）、名古屋市市中村区・西区北西部（蔭山・加登・鬼頭・鈴木・松田2007）の分析に加え、今回新たに西春日井郡清洲町（現清須市）・西春日井郡春日町（現清須市）・稲沢市南東部・西春日井郡西春町（現北名古屋市）・名古屋市西区北部の地域について解析を行った。地籍図の解析方法は、地籍図に記載された地目を寺院・神社・宅地・畑地・林・藪と水田・草生などの2群に分け、前者を微高地群、後者を低地部として色分けして図化した（図1・表1）*。その結果、27箇所の微高地群（微高地群1a～微高地群25）と、26箇所の低地部（低地部1a～低地部25）が抽出された。以下、微高地群と低地部について、それらの特徴や前後関係について述べるため

* 図化した地籍図

宇福寺村、中之郷村、落合村、下之郷村、井之口村、日下部村、奥田村、増田村、六角堂村、北市場村、西市場村、一場村、清洲村、廻間村、土田村、上條村、田中村、朝日村、阿原村、小場塚新田村、助七新田村、寺野村、須ヶ口村、西堀江村、東今宿村、西今宿村、上萱津村、甚目寺村、方領村、石作村、新居屋村、森村、小路村、堀越村、下小田井村、中小田井村、平田村

尚、本稿では、2つの並行する微高地群2箇所とその微高地群に挟まれた低地部1箇所の組み合わせを比較的大規模な旧流路との痕跡とし、1箇所の微高地群の中に流路の痕跡と思われる

48

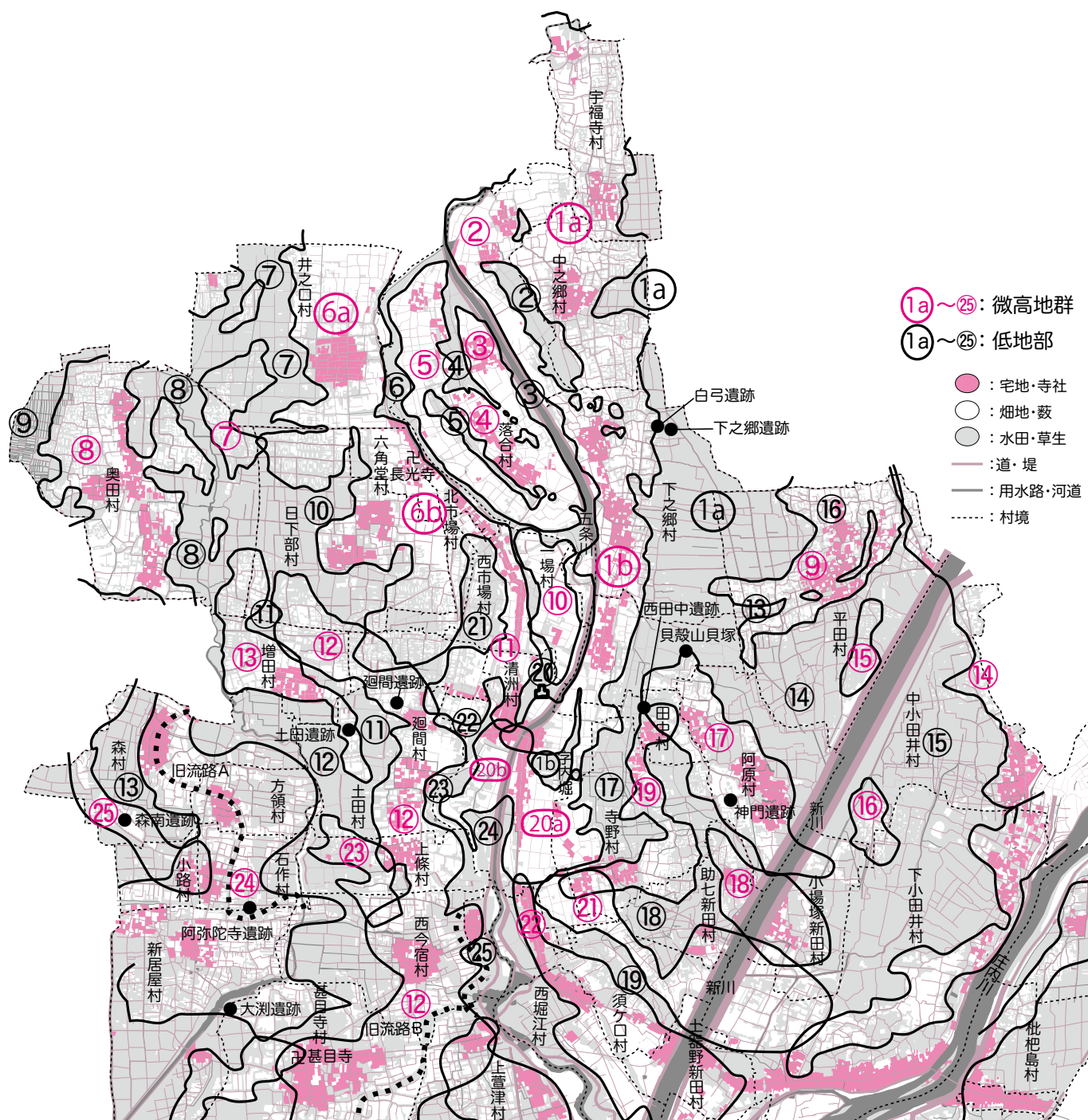


図1 清須市周辺の地籍図からみた旧地形（約 1:42,500）

表1 地籍図からみた地形分類

関連する 地形群	地形	東側・北側微高 地群	低地部	西側・南側微高 地群	地形が形成された時期
春日	地形1	微高地群1a・1b	低地部2・1	微高地群2・3	
春日	地形2	微高地群2	低地部3	微高地群3	18世紀末～現代
春日	地形3	微高地群3・4	低地部4・5	微高地群5	
春日	地形4	微高地群3	低地部4	微高地群4・5	
春日	地形5	微高地群5	低地部6	微高地群6a・ 6b・10	古代～18世紀末(古城 絵図)
福田川	地形6	微高地群6a	低地部7・8	微高地群7・8	
福田川	地形7	微高地群6a・7	低地部8	微高地群8	
福田川	地形8	微高地群6a	低地部10・8	微高地群6b	
福田川	地形9	微高地群12	低地部11	微高地群13	
福田川	地形10	微高地群13	低地部(8)・12	微高地群24	
福田川	地形11	微高地群24	低地部13	微高地群25	弥生時代以前
朝日遺跡 谷A・谷B	地形12	微高地群9の北 側・1b	低地部13・1a・ 1b・16・17・18	微高地群9の南 側・17	弥生時代以前、朝日遺 跡谷A
朝日遺跡 谷A・谷B	地形13	微高地群9・15・ 16・19・21	低地部2・1a・ 1b・14・17・24・ 25	微高地群17・ 1b・20a・20b	弥生時代後期以後、朝 日遺跡谷B
朝日遺跡 谷A・谷B	地形14	微高地群9・19・ 21	低地部1a・17・ 25	微高地群1b・ 20a	古墳時代中期～古代、 朝日遺跡廃絶後
五条川下 流	地形15	微高地群11	低地部21	微高地群6b	地形としては古い、自 然河道を伴わない可能性 あり
五条川下 流	地形16	微高地群10・ 20b・20a・1b・ 22	低地部20・22・ 24・25	微高地群11・12	古代～戦国時代
五条川下 流	地形17	微高地群1b・ 20b・20a・22	低地部6・3・23・ 25	微高地群10・ 11・12	織豊期～18世紀末(古 城絵図)
五条川下 流	地形18	微高地群1b・ 20a・22	低地部3・25	微高地群10・ 20b・12	18世紀末～現代

(2) 春日地域における地形

春日地域とした西春日井郡春日町（現清須市）と西春日井郡西春町（現北名古屋市）の地域では、比較的大規模な河川によるものと思われる地形が5箇所みられる。

地形1は微高地群1a・1b（五条川東岸の宇福寺村から中之郷村西部を経て下之郷村西部に至る）と微高地群2・3（落合村の五条川東岸から下之郷村西部と落合村五条川西岸の付近）に挟まれた低地部2・1（落合村東端部分から下之郷村西部を北西から南東にのびる窪地状に見える水田部分）である。

地形2は微高地群2（落合村の五条川東岸の付近）と微高地群3（五条川西岸の落合村東側付近）に挟まれた低地部3（現在の落合村と下之郷村の中を流れる五条川）が抽出できる。

地形3は微高地群3・4（五条川西岸の落合村東側）と微高地群5（落合村西側）に挟まれた低地部4・5（五条川西岸の落合村中央部を北東から南にのび、微高地群1・4のつながる地点を挟んでその南を北西から南東にのびる部分）である。

地形4は微高地群3（五条川西岸の落合村東側付近）と微高地群5・4（落合村西側から落合村中央部を経て南東にのびる部分）に挟まれた低地部4（五条川西岸の落合村中央部を北東から南にのびる部分）である。

地形5は微高地群5（五条川西側の南北に弧状にのびる部分）と微高地群6a・6b・10（井之口村東部から六角堂村と北市場村を経て下之郷村に至る部分）に挟まれた低地部6（落合村西端を南北に弧状にのびる部分）である。

(3) 福田川地域における地形

改修前の福田川の流域である稲沢市南東部、西春日井郡清洲町西部（現清須市）、海部郡甚目寺町（現あま市）の地域では、比較的大規模な河川によるものと思われる地形を6箇所抽出した。

地形6は微高地群6a（井之口村東部から奥田村北東部に至る部分）と微高地群7（井之口村西部から奥田村中央北端部に至る部分）に挟まれた低地部7・8（井之口村中央部と井之口村西端部から奥田村中央部にある福田川周辺部）である。

地形7は微高地群7（井之口村西部から奥田村中央北端部付近）と微高地群8（奥田村西側）に挟まれた低地部8（奥田村中央部付近）である。

地形8は微高地群6a（井之口村東部から奥田村北東部に至る部分）と微高地群6b（六角堂村北部から日下部村中央部に至る部分）に挟まれた低地部10・8（六角堂村北西端部・日下部村中央部北側を経て奥田村東部に至る部分）である。

地形9は微高地群12（日下部村南端中央部から増田村北東部を経て廻間村中央部に至る部分）と微高地群13（日下部村南西端部・奥田村南東端部から増田村南西部を経て土田村西部に至る部分）に挟まれた低地部11（日下部村南西部から増田村中央部を経て土田村中央部に至る部分）である。

地形10は微高地群13（日下部村南西端部・奥田村南東端部から増田村南西部を経て土田村西部に至る部分）と微高地群24（森村中央部から方領村を経て石作村南西部・小路村をとおり、新居屋村東部に至る部分）に挟まれた低地部8・12（奥田村東部からつつく森村東部を経て土田村西部に至る部分）である。

地形11は微高地群24（森村中央部から南西にある方領村を経て石作村南西部・小路村をとおり、新居屋村東部に至る部分）と微高地群25（森村南西部から小路村中央部に至る部分）に挟まれた低地部13（森村中央部の北端から南端に至る部分）である。

(4) 朝日遺跡谷 A・谷 B 地域における地形

現在の名古屋市西区と清須市の境界部分にひろがる朝日遺跡を中心とする地域で、西春日井郡春日町東部（現清須市）と西春日井郡清洲町東部（現清須市）、西春日井郡新川町北部（現清須市）、名古屋市西区北西部の地域では、比較的大規模な河川によるものと思われる地形を3箇所抽出した。

地形12は微高地群9北側・1b（平田村北東部から同村中央部北側から朝日村西部に至る部分）と微高地群9南側・17（平田村北東部から同村中央部南側から朝日村南西端部と田中村北部を経て阿原村西部を経て小場塚新田村北端部に至る部分）に挟まれた低地部13・1a・

1b・16・17・18（平田村中央部から清須村字内堀付近と田中村南部・寺野村中央部を経て助七新田村西部に至る部分）である。

地形 13 は微高地群 9・15・16・17・21（平田村中央部から中小田井村南端部に至る部分と朝日村南端中央部と田中村中央部を経て寺野村南部と須ヶ口村北部に至る部分）と微高地群 17・1b・20a・20b（朝日村南端中央部から阿原村西部を経て小場塚新田村に至る部分と下之郷村西部から朝日村西部を経て清洲村東部付近に至る部分）に挟まれた低地部 1a・1b・14・16・17・18・24・25（下之郷村東部・平田村北西部から朝日村北東部を経て阿原村東部・平田村南部に至る部分と朝日村北東部から分かれて清洲村字内堀付近と寺野村西部を経て須ヶ口村北端部に至る部分）である。

地形 14 は微高地群 9・19・21（平田村中央部から中小田井村南端部に至る部分と朝日村南端中央部と田中村中央部を経て寺野村南部と須ヶ口村北部に至る部分）と微高地群 1b・20a（下之郷村西部から朝日村西部を経て清洲村東部付近に至る部分）である。

（５）五条川下流地域における地形

五条川流域の西春日井郡清洲町（現清須市）を中心とする地域で、比較的大規模な河川によるものと思われる地形を 4 箇所抽出した。

地形 15 は微高地群 11（北市場村中央部から西市場村東部を経て廻間村中央部付近に至る部分で、廻間村中央部にて微高地群 12 とつながっている）と微高地群 6b（北市場村中央部・日下部村東部付近から廻間村北西部にて至る部分で、廻間村北西部にて微高地群 12 とつながっている）に挟まれた低地部 21（西市場村西部から廻間村中央部に至る部分）である。

地形 16 は微高地群 10・20b・20a・1b・22（一場村北部から清洲村北東部を経て清洲村中央部を通って須ヶ口村に至る部分）と微高地群 11・12（北市場村中央部から西市場村東部と廻間村中央部、土田村東部、上條村東部を経て西今宿村に至る部分）に挟まれた低地部 20・22・24・25（一場村西部から清洲村北東部と清洲村中央部を経て須ヶ口村西部に至る部分）である。

地形 17 は微高地群 1b・20b・20a・22（下

之郷村西部から朝日村西部と清洲村中央部を経て須ヶ口村西部に至る部分）と微高地群 10・11・12（一場村北部から廻間村東部、土田村東部、上條村東部を経て西今宿村に至る部分）に挟まれた低地部 6・3・23・25（落合村南端部・一場村北東端部から御園村と朝日村の現五条川を通り、廻間村東端部と土田村東端部、上條村東端部を経て須ヶ口村西端部に至る部分）である。

地形 18 は微高地群 1b・20a・22（下之郷村西部から朝日村西部と清洲村中央部を経て須ヶ口村西部に至る部分）と微高地群 10・20b・12（一場村北部から清洲村中央部を経て西今宿村に至る部分、自然地形の起伏を多く含み古い地形に伴う低地部が多く入り込む）と低地部 3（現五条川の部分）である。

（６）地形の新旧関係

次に上述した 18 ヶ所の地形の新旧関係を分析する（図 2）。

春日地域では、地形 2 の低地部 3 は 18 世紀末に瀬替えされた五条川の流路に伴う地形で最も新しい。それ以前には地形 5 に伴う低地部 6 が 17 世紀中頃に描かれた『古城絵図』の五条川に対応すると思われ、その東側にのびる微高地群 5 が落合村北端部において地形 3 と地形 4 に伴う低地部 4 を閉ざしている。この地形 5 に伴う微高地群 5 の上には南北に現在の美濃街道がはしっており、平安時代にさかのぼる長光寺をはじめとする寺院や古代にさかのぼる遺跡が立地している。地形 1 に伴う低地部 2 は微高地群 5 に続く微高地群 2 が低地部 2 の北端を閉ざしていること、微高地群 1b の北端部にある下之郷遺跡で、弥生時代の貝塚が確認されていること、その西に隣接する白弓遺跡が弥生時代～古墳時代の遺跡であることから、微高地群 1a に伴う地形 1 の形成が弥生時代以前になる可能性がある。また地形 3 に伴うと考えた低地部 5 は低地部 4 の西にある微高地群 5 から続く微高地群 4 により北端を閉ざされており、地形 3 は地形 4 より古いものと考えられる。

福田川地域では、地形 7 は地形 6 に伴う低地部 7・8 の内、低地部 7 が微高地群 7 により南端部を閉ざされた後の地形である。地形 9

	弥生時代以前	古墳時代	古代	中世	戦国時代	江戸時代 (18世紀末以前)	江戸時代～現代 (18世紀末以後)
五条川上流	地形 1 →地形 4→地形 3 →地形 5						→地形 2
福田川	地形 6→地形 7→地形 8 地形 9・地形 11→地形 10→地形 8						→地形 10 は改修 前の福田川が流 れる地形に続く
朝日遺跡 谷 A・谷 B	地形 12 →地形 13 →地形 14						
五条川下流	地形 15 →地形 16 →地形 17						→地形 18

図2 地籍図からみた地形の変遷

はその中に伴う低地部 11 が地形 10 に伴う微高地群 13 により南端部が狭く閉ざされていく状況になっており、地形 10 より古いように思われる。地形 11 に伴う低地部 13 は地形 10 に伴う微高地群 24 により完全に閉ざされており、古い特徴を持つ。地形 8 に伴う低地部 10 は地形 6 に伴う微高地群 6a と地形 7 に伴う微高地群 7 の南側を削剥しているようであり、また地形 9 と地形 10 に伴う微高地群 12 と微高地群 13 の北側も削剥しているようにみえるので、地形 8 は福田川地域の地形の中では最も新しい特徴が見られる。福田川地域の地形形成年代は、微高地群 12 に弥生時代後期から古墳時代前期に営まれた廻間遺跡、微高地群 13 に弥生時代～古墳時代の土田遺跡、微高地群 25 に弥生時代中期以後に営まれた森南遺跡、微高地群 24 に弥生時代中期～後期に営まれた阿弥陀寺遺跡が立地しており、これらの地形の原型が弥生時代以前に形成されていた可能性が高い。

朝日遺跡谷 A・谷 B 地域では、地形 12 に伴う低地部 13 が朝日遺跡谷 A の痕跡と考えられ（県埋文セ・石黒編 1991）、微高地群 17 の北側の縁辺にて弥生時代の西田中遺跡があること、同じ微高地群 17 の中央部付近の阿原村神門にて古墳時代前期初頭の線刻人面文土器が出土していることから、地形 12 が弥生時代以前に形成された地形である可能性が高い（金森・天野 1998）。また低地部 1b にあたる清洲城下町遺跡 62H 区・63L 区では古墳時代後期以前の流路痕が確認されており、地形 12 の段階にさかのぼるものと考えられる。地形 13 に伴う

低地部 1a は弥生時代以前の流路により形成された可能性が高いが、微高地群 9 が低地部 1a と南に続く低地部 14 により途切れている状況が明瞭に確認できる。朝日遺跡における調査成果からは、弥生時代後期頃に低地部 13 を流れていた谷 A から、南東に流れる谷 B が流路を変えて流れることが確認されており、古墳時代中期以後には朝日遺跡北側を北東から南西に流れる流路痕が確認されている（県埋文セ・蔭山編 2007）*。この流路に伴う影響で、朝日遺跡北集落と南集落、その周囲にある墓域にあたる弥生時代の遺構の上層に流路の痕跡や湿地性堆積物を多く確認できる点と対応する（県埋文セ・石黒編 1991 他）。清洲城下町遺跡の発掘調査成果では古代の遺構・遺物が清洲村東部にある 62E 区などの地点において多数確認されており、この段階に低地部 17 付近に流路の中心が移り、微高地群 19 が形成されていたものと考えたい。地形 14 は地籍図における地形 13 の低地部 1b の東側において微高地群 1b と微高地群 20a の一部がつながっている状況が確認でき、地形 13 の低地部 17 のみに流路が存在した可能性を考えた。

地形 15 に伴う低地部 21 は南西側を微高地群 12 により閉ざされており、地形 9 より古い地形と考えられ、低地部 21 は北側を微高地群

* 春日町教育委員会による平成 13 年度に実施された朝日遺跡、春日町大字下之郷字長久手・舟付地点の立ち会い調査において、北居住域北東部をめぐる外環濠の溝を削剥する流路痕が観察された。その流路では、西に向かう側方堆積が観察された。調査時には春日町教育委員会の鈴木弘子氏にお世話になった。

21 に閉ざされていることから、地形 15 は地形 16 より古い地形の可能性が高い。地形 17 に伴う低地部 6・3・23・25 は 17 世紀中頃に描かれた『古城絵図』にみられる五条川の流路とほぼ一致しており、地形 16 に伴う低地部 20・22 がその南側を微高地群 1b により閉ざされており、低地部 24 は微高地群 20b によりその北側を閉ざされていて、地形 16 は地形 17 に先行するものであることが明らかである。地形 18 は 18 世紀末にある五条川の瀬替え以後の地形で、現在の五条川の元となるものである。五条川の両岸には堤があり、先に述べたように江戸時代以前に形成された地形の起伏を多く横断する状況が観察できる。

3. 発掘調査事例からたどる旧河川

(1) 発見された自然流路の分類

発掘調査で発見される自然流路の認定には若干の困難が伴う。自然流路は巨大であるために発掘調査では多くの場合に全体を把握することができない。加えて、特に、後期清須城下町で構築される幅が 10～40m の規模を持つ巨大な堀の存在は、自然流路との峻別が難しい場合もある。こうした中、清洲城下町遺跡で発見された自然流路には 3 種のパターンが存在すると考えられる。

自然流路 A タイプ 主たる堆積物が厚い細粒砂から中粒砂となるもの。この堆積物は激しい流水に伴うものと思われ、地形を大きく浸食する場合も考えられる。調査において流路岸は不明瞭な場合が多いが、概ね外側に行くに従い極細粒砂からシルトの堆積に変化することが多いと思われる。

自然流路 B タイプ 主たる堆積物が厚い粘土となるもの。河床部が三日月状に埋積河跡沼になることもあり、流路岸を認識できる場合が多い。水流の変更により止水的な環境になっていたものと思われる。場合によっては、人工的な堀と識別が困難なケースもある。

自然流路 C タイプ 細粒砂やシルトなどが互層となって堆積するもので、緩い傾斜を持つ場合が多い。流路の位置が徐々に移動していく際に、微高地化する部分で生じる堆積と推定され

る。

上記の区分にしたがい個別の事例を紹介する。

(2) 低地部 20・低地部 22 に関連する自然流路

御園神明社西側に南北に広がる低地部 20 では、自然流路 A タイプと B タイプの二者が確認された。この流路は低地部 22 につながるものと推測されるが、ここでは北側の調査区から発掘調査事例を紹介し、順次この流路を南へ追跡することとしたい (図 3)。

(2-1) 61AB 区 (県埋文セ・小澤編 1992)

名古屋環状 2 号線関連の調査区 61AB 区は、報告書では「旧河床部と思われる後背湿地に位置し」、13～14 世紀「の段階では沼沢地になっていたと思われ、暗灰褐色粘質土や粗砂などが互層となってい」たという (10p)。幅約 45m、深さ約 2m の南北方向の大溝が検出された。粘土を主体とする埋土から多量の瓦を含む城下町期後期の遺物が出土しており、織田信雄の改修による後期清須城内堀に相当すると推定される。内堀が構築される際に整地が行われており、堀肩部は整地土が堆積している (24P)。城下町期前期の状況は不明であるが、おそらく城下町期前期以前に自然流路 C タイプが存在したと考えられる。その凹地を利用して城下町期後期の内堀が構築されたとみられる。

(2-2) 清須市一場地内道路敷設関連

(清須市教委・寛他 2012)

清須市 12 区は県埋文セ 61B 区に北接する地点で、報告書では耕作土下位に IV 層 (河川または河川の氾濫堆積) と V 層 (河川堆積) が堆積するという。IV 層から山茶碗などの中世陶器が出土し、濃尾地震とは異なる地震痕 (液状化現象) が貫いている。そして、IV 層の上面で城下町期前期の溝 S D 18 と城下町期後期の内堀 S D 20 が検出された。V 層は明黄灰色砂～粗砂が 1m 以上確認されている。鬼頭によれば、V 層に相当する部分は流路の中央部付近の堆積と推定され、IV 層に相当する部分は急激な粒子サイズの変化が認められるとし、突然の流路変更があったことを想定した (鬼頭 2012)。

当地点では、城下町期前期よりも前に自然流路 A タイプが流れ、西部で前期の遺構、東部で後期の遺構が掘削されたと整理できる。

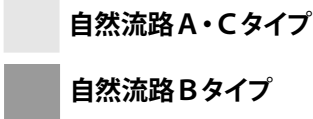


図3 清洲城下町遺跡発掘調査による旧河川跡（約 1:5,000）

(2-3) 学校法人佑愛学園地点

(清須市教委・未報告)

清須市 13 区は県埋文セ 59 C 区に北接し、黒灰色粘土が堆積する自然流路 B タイプが確認されている。本論執筆時点で発掘調査中であるが、流路の西肩が検出され、粘土層から木製品を含む遺物が出土した。これらの遺物は城下町期前期に位置づけられる。この流路が埋積した後に南部は整地され、北部は中堀が掘削された。南部の整地層上面で柱穴などの遺構が構築され、これらは現状では城下町期後期に属するとみられる。

当地点では、城下町期前期に埋積した河跡沼が存在し、後期に大規模な造成を伴い中堀と屋敷(樹木屋敷か)が設置されたと整理できる。

(2-4) 清洲町総合福祉センター関連

(清洲町教委・柴垣編 2002)

本丸北に所在する清洲町 02 区では、耕作土下にシルト層とオリーブ黄色砂層(基盤層)が堆積する。調査区東部では、基盤層(砂層)上部に植物遺体を含む黒褐色シルト層が堆積し、ヨシなどの多年生植物が繁茂する低湿地の様相を呈するという(2P)。また、調査区北部では黄褐色砂層上に 6 層の砂質シルト層が堆積する。城下町期の溝や井戸などの遺構はシルト層上面で確認され、調査区北東半部で城下町期前期の遺構群が、南部と西端部で内堀が展開している。

当地点では、城下町期前期よりも前に自然流路 A タイプが流れたとみられ、北東側に自然堤防の端部が所在する。この自然堤防を中心に城下町期前期の遺構群が広がり、後期に本丸と二の丸が普請されたと整理できる。

(2-5) 62A・N 区

(県埋文セ・鈴木編 1994b)

五条川河川改修関連の調査区のうち、本丸地区北部にある 62A 区では、調査区全体で溝状遺構が検出された。調査時点では沼沢地と認識されたが、詳細は不明である。城下町期後期よりも前の自然流路 B タイプが流れたとみることも可能だが、確定的ではない。一方、本丸地区南部にある 62N 区では、地層が現五条川(東側)に向かって傾斜する状態が認識されたが、詳細は不明である。

この 2 つの調査区では、積極的に自然流路のあり方を検討することは難しいと思われる。

(2-6) 清洲ふるさとのやかた建設関連

(清洲町教委・野口編 1990)

本丸に北接する清洲町 90 区では、水田耕作土下の標高 2m 前後に粘土と砂の互層(基盤層)が堆積する。その上位で溝 SD01 と盛土状遺構が検出され、多くの瓦類と江戸時代の陶磁器が出土した。基盤層下に「旧五条川と考えられる粗砂層」があり、湧水したという(4P)。

当地点では、おそらく城下町期後期よりも前に自然流路 A タイプが流れたとみられる。

(2-7) 94A・93C 区

(県埋文セ・鈴木編 1997)

本丸東部で前五条川堤防に西接する 94A・93C 区では、標高約 3.5m まで褐色シルトや黄褐色シルトが厚く堆積し基盤層を形成する。このシルト上面で城下町期後期の本丸内堀 SX01 などが検出された(7P)。シルト最上部から 15 世紀中頃の陶磁器・土器類が出土し、この時期の遺構も伴う。

当地点では、少なくとも城下町期以降は流路ではなく陸地化した部分といえる。

(2-8) 92F 区・本丸北西部トイレ地点

(県埋文セ・鈴木編 1997 他)

本丸南部に相当する 92F 区では、近世の用水施設の下位に調査区全体が黒色粘土を主体とする堆積物が確認された(11P)。黒色粘土の最下部は標高 0.7m を測る。城下町期後期の瓦が多量に出土したことから、清須城南部の内堀であると推定される。一方、本丸北西部トイレ地点でも、調査区全体が黒色粘土を主体とする堆積物が確認され、城下町期後期の瓦が多量に出土した。清須城北西部の内堀であると推定される。

両地点とも、城下町期前期以前の状況を知ることとはできない。(2-1) 61AB 区と同様に、後期清須城内堀の前身となる中世の流路が存在した可能性を指摘できるが、不明といわざるを得ない。

(2-9) 96・97C 区

(県埋文セ・宮腰他編 2002)

96・97C 区は、94A 区の南東部のより旧五条川に近い位置に当たる。西側の微高地部で

は、整地土下の標高約 2.2m で灰色シルトやオリブ灰色粘質シルトが堆積し基盤層を形成する。これを掘削する形で流路に平行して溝を掘り城下町期後期の石垣が構築された。石垣遺構の東側に城下町期後期の自然流路 SX01 が存在する。調査区北西部で急激に落ち込むが、全体にはなだらかに傾斜し現五条川の流路部分に最深部（本流部）があったと思われる。川岸に相当する石垣前面で多量の瓦が出土した。石垣遺構の下位に城下町期前期の幅約 7m の溝 SX02 が存在し、木製品を多量に含むシルトが埋積していた。溝 SX02 の底面は標高約 1.0m を測り、その下位には部分的に黒色粘質シルトが認められるが、大部分は暗青灰色粗砂が厚く堆積する。溝 SX02 の評価は前期清須城居館の西堀に比定する説（鈴木 2008 など）があるものの、旧河川跡の可能性も指摘でき、現時点では定見を得ていない。なお、溝 SX02 の下位には暗青灰色粗砂が厚く堆積していた。

当地点では、暗青灰色粗砂の存在から城下町期前期よりも前に自然流路 A タイプが流れたとみられる。溝 SX02 を自然流路と解釈すると、城下町期前期では部分的に自然流路 B タイプが存在し、城下町期後期には現五条川の河川敷に相当していたと整理できる。

（2-10）97A～63C 区

（県埋文セ・鈴木編 1994a、宮腰他編 2002）

五条川河川改修に伴う発掘調査のうち、五条橋地区（97A・97B・93A・92C・90B・92D・62C・90C・90D・63C 区）で旧五条川跡東岸部（IV NR4001・Ⅷ NR02）が検出されており、下半は灰色～灰黒色粘土が厚く堆積する。近接する 63B・61A・92E 区などの範囲と南側の 89E・91A 区ではこの流路は確認されていないので、南部では西に彎曲して流れたものと推定される。97B・90B・62C 区で流路が入り込み入江状となり、90D 区では河床部が平面で三日月状に埋積した河跡沼が確認された。入江部では木製構築物 IV SX4013・IV SX4014 があり、川岸には杭列や岸に平行する溝などが設けられた。この河川跡は城下町期前期から徐々に埋積し、城下町期後期には完全に陸地化してその上面で中堀などの遺構が形成された。ただし、97A・97B 区では宿場町期の遺物を含む旧五条

川跡（NR00・NRA・NRB）が確認されている。一方、五条橋地区の東部（91D・91E・92A・92B 区：鈴木他編 1994a）では標高 4.0m 前後で宿場町期の遺構面、標高 3.5m 前後で城下町期の遺構面が展開し、その下位から大きく灰黄褐色シルト、暗い灰黄色砂質シルト、褐色粘質土の順に堆積している。褐色粘質土がわずかに凹む部分には黄褐色粘質シルトがあり、その上面から奈良時代の遺構が掘削されていた。このことから旧五条川跡東岸の微高地は古代以前に形成されたと類推される。

当地点では、自然流路 B タイプが流れており、城下町期前期から徐々に埋積し流路は西へ移動し、城下町期後期には概ね現五条川に固定されたものと推測される。当地点では 97B 区で確認されたように東岸の微高地を削るように流れているが、広い目でみれば東岸微高地は本流路によって形成された自然堤防とみられ、その形成は古墳時代後期以前まで遡る。当地点の北側で南流する自然流路 A タイプが中世に本地点に存在したとしても矛盾は生じない。

（2-11）清須市清洲小学校体育館関連 （清須市教委・桐山他 2009）

本丸南に所在する清須市 08 区では、盛土と耕作土の下に調査区のほぼ全体で河道内埋土層（4P）が堆積し、調査区南壁付近で河岸部が確認された。川岸部は標高 2.0m でオリブ褐色シルトなどが堆積し、標高 1.0m で黄褐色中粒砂層（基盤層）となる。河道内埋土は新古 2 段階に区分され、新埋土層では 19 世紀まで、古埋土層では 18 世紀までの遺物を含む。堆積物はオリブ黒色や黒褐色を呈するシルトや中粒砂の互層である。流路南肩はほぼ東西方向を向き、調査区北東部に中州状の砂の高まりが確認された。また、南西部では河岸が 2 時期に分かれて形成されたといい、新河岸と古河岸の間の堆積層から永享 11 年（1439）に書写された柿経が出土した。

古河岸は 1439 年には存在したと推測されることから、15 世紀以前に自然流路 B タイプが東西方向に流れたとみられ、これが（2-10）97A～63C 区で確認された南部で西に向きを変えた自然流路に対応する可能性が高い。

(2-12) 清須市清洲小学校プール関連

(清須市教委・石松他 2007)

本丸南に所在する清須市 07 区では、耕作土下ににぶい黄橙色砂質土層などが堆積し、城下町期の遺構が展開する。当地点では、少なくとも城下町期以降は流路ではなく陸地化した部分といえる。

(2-13) 県道助七西市場線関連

(98A 区：県埋文セ・早野編 2005)

98A 区西部で自然流路 NR01 の東岸部が確認された。上層が灰色シルト、中層が灰色粗粒砂によって埋積され、下層は均質な粘土が連続して堆積した。上層と中層は 18 世紀後半の遺物を含むし、下層は中世の遺物が散発的に出土するという。基盤層（灰白色粗粒砂）は標高約 2.2m で確認され、その上面から遺構が確認され、12 世紀後半以降の遺物が出土した。

当地点では、12 世紀頃から自然流路 B タイプが流れ、18 世紀に埋積したことが判明した。これが (2-11) 清須市清洲小学校体育館関連の調査で確認された河道に繋がるものと推測される。

(2-14) 県道助七西市場線関連

(10B・11A 区：県埋文セ・鈴木編 2013)

10B 区から 11A 区にかけて下部で中粒砂が厚く堆積する部分の確認された。この砂層から灰釉陶器小破片が出土しており、平安時代まで遡る自然流路が存在したと推測されている。その東岸部では浅黄色シルトなどで構成される自然堤防が展開しており、古墳時代後期から平安時代までの集落が展開していた。砂で埋積された自然流路の上位には城下町期前期以降の遺構が展開していた。

当地点では、平安時代以前から自然流路 A タイプが流れ、中世にはほぼ埋積していたと想定される。流路は南北に走る形と想定され、その上流部は (2-10) 97A～63C 区から繋がるものと推測されるが、(2-11) 清須市清洲小学校体育館関連の調査で確認された河道とは別の流れとみられる。(2-11) の自然流路と (2-14) の自然流路は分岐したものか、流路変更による新旧関係があるものかは、現時点では判断が難しい。

(2-15) まとめ

御園神明社西側に南北に広がる低地部 20 では、城下町期前期までに埋積した自然流路 A タイプと城下町期後期までに埋積した自然流路 B タイプが確認された。自然流路 A タイプは 14 世紀頃に部分的に中州状？に陸地化し、そこに城下町期前期の遺構が構築された。なお、後期清須城本丸地点（現清洲公園）では、確実に検出された自然流路 A タイプの範囲は狭いため西側の清須城内堀もその範囲に含めて考えたい。その場合、後期清須城本丸部分の微高地（94A・93C 区）は中州状の微高地と考えざるを得ない。自然流路 B タイプは大きく蛇行しながら流れたと思われる、現状ではその位置を部分的にしか復元できない。城下町期前期の早い段階に機能していたが徐々に埋積し、城下町期後期には完全に埋積してしまった部分が存在するといえる。

このように低地部 20 に関わる自然流路を検討した結果、城下町期前期以前は御園神明社西側に河川が流れることが推測された。この地点は、城下町期後期には清須城本丸・二の丸・樹木屋敷やそれに付随する堀などが構築され、河川はほぼ現五条川の位置に流れたものと考えられる。この結果、織田信雄の清須城の改修は流路の変更を伴うものであったことが推定される。

(3) この他の発見された自然流路

前項で示したものの以外自然流路について説明する。

(3-1) 清須市給食センター地点

(清須市・未報告)

清洲城下町遺跡の最北端部に存在する清須市給食センター地点では、江戸時代に埋積した旧河川（自然流路 A タイプ）が確認された。現五条川に瀬替えされる以前の流路と思われる、『春日井郡清須村古城絵図』に描かれた「清須川」に合致するとみられる。

(3-2) 00B 区（県埋文セ・蔭山 2001）

五条川河川改修に伴う発掘調査のうち、名古屋環状 2 号線の南で五条川右岸に 00B 区は存在する。ここでは、東側に傾斜するシルトや砂の互層状の堆積（自然流路 C タイプ）が確認された。堆積物中から山茶碗片が出土した。流路の中心は現五条川の位置にあると思われる、詳細

は不明。低地部 20 を主体とする流路とは直接的に関連しないと思われるが、その分流であった可能性は考えられる。

(3-3) 62H 区周辺

(県埋文セ・鈴木編 1990)

現清洲東小学校西側に所在する 62H 区では、厚い黄褐色シルト層の上面で城下町期の遺構、シルト層中で奈良時代を中心とした遺構が展開した。このシルトと基盤層である粗砂層の間に黒灰色粘土が厚く堆積していた。北側の 63E 区および南側の 62I 区に比べ粘土層は厚く、粗砂の上面は約 1m 下がり標高約 0.5m を測る。

当地点では、古墳時代後期よりも前の谷地形が存在し、自然流路 B タイプが流れていたと考えられる。弥生時代まで遡る可能性は否定できない。

(3-4) 63F 区周辺

(県埋文セ・鈴木編 1990)

62H 区の北約 200m にある 63F 区では、奈良時代から城下町期の遺構が展開するシルト層の下位に広がる黒灰色粘土層が確認された。この粘土がどのように展開したかは全く不明であるが、弥生土器片が少量出土している。

当地点では、弥生時代まで遡る自然流路 B タイプが存在した可能性を指摘できる。

(3-5) 89D 区～90F 区

(県埋文セ・鈴木編 1994b)

五条川河川改修に伴う発掘調査の南部地区では、現地表面が低く、標高約 2m で砂層が確認される。自然流路 A タイプの存在が考えられるが、この地区では鎌倉～室町時代の溝などが確認されたことから、流路は古代以前に形成されたものと考えられる。

4. まとめ

最後に、等高線図による現在の表層地形解析と明治 17 年作成の地籍図の解析との関係について述べ、清須を流れていた旧河川を推定したい。その際、先に分析した発掘調査成果との関係も必要に応じて触れ、問題点についても述べる。

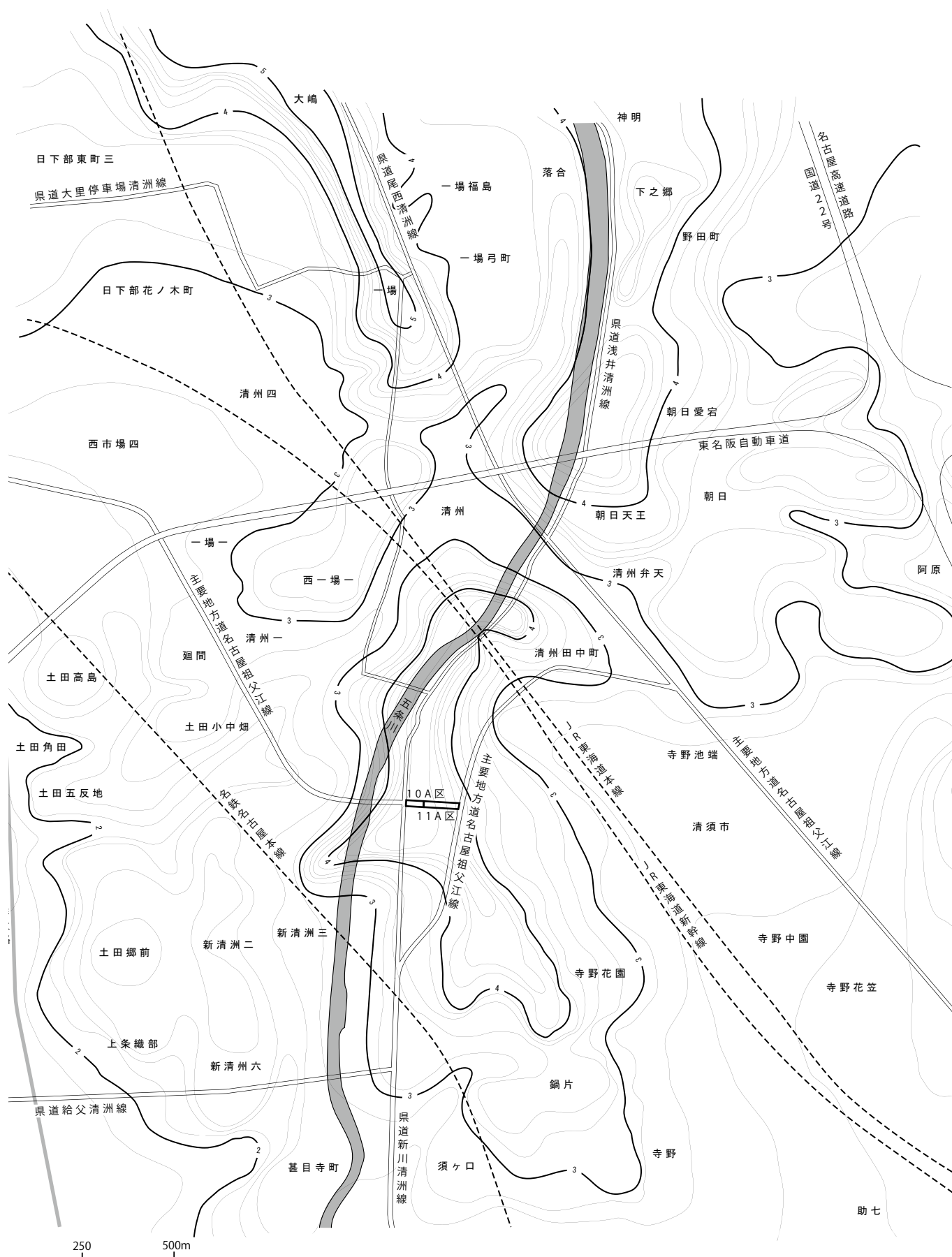
(1) 現在の表層地形との対応関係

まず、明治 17 年作成の地籍図の解析から抽

出できた地形と等高線図からみた現在の表層地形との対応関係について述べる。ここでは、清須市本町を中心に東西約 2.8km、東西約 3.0km の現在の表層地形を分析された鬼頭剛の解析成果(鬼頭 2013)と比較する(図 4)。鬼頭は、主に平成 18 年測量「清須市都市計画図」を用いて、0.20m 間隔の等高線図を作成し、清須市本町付近を流れる五条川流域には 5 つの相対的に標高の高い場所と 7 つの谷地形を抽出した。相対的に標高の高い場所については、地籍図に見られる微高地群と概ねその位置や平面形が対応している。一方、谷地形については、概ね地籍図に見られる低地部の形状は対応するが、微高地群の部分にも重なる地点も見られた。以下において、現在の表層地形と地籍図に見られた地形と対応しない場合について検討したい。なお、鬼頭による現在の表層地形を表した等高線図においても、近世から現在に至る大規模な公共施設や工場等の建物や道路の影響を外したものである。しかし、主に戦国時代から現在にかけての人為的開発による地形改変などのために、清洲町中心部周辺においては、現在の表層地形において過去の自然地形を読み込むことが困難になっている。

以上の限定条件があるが、現在の表層地形に見られる地形と地籍図に見られる地形が対応しない場合について 3 例述べる。

一つ目は、清須市田中町から寺野、助七に至る標高 1.6m ～ 2.8m の谷地形は低地部 17 に概ね対応するが、清須市田中町と清須市弁天の間にある北西から南東にのびる谷地形や清須市田中町の南西側にある谷地形は微高地群 1b にあたり、低地部とならないことである。この 2 つの地点は地籍図中の微高地群 1b の中に分布する水田の凹地部分に対応する可能性が高いが、この部分は城下町後期の清洲城跡の中堀の痕跡と考えられるものであり、地籍図の解析からは微高地群 1b がこの谷地形の部分も続くように考えられた。この谷地形に関係する発掘調査成果として、清須市清洲弁天西部にある 90A 区では、中世の井戸が標高 4m 付近から掘り込まれており、少なくとも中世には微高地群 1b が南北に続く可能性が高いことを示唆している。



二つ目は、清須市落合から一場にかけての標高 3.0m ～ 3.8m の谷地形と清須市清洲から土田五反地に至る標高 1.6m ～ 2.8m の谷地形は五条川西岸を北北東から南西に続くものであるが、微高地群 1b と微高地群 10 の間にある低地部 3 の南端部に清須市落合の谷地形はあたるが、その南にのびる地点には微高地群 10 があり、微高地群 10 の南北に縦断し、低地部 20 にあたる部分に至る。低地部 20 の南西には美濃街道のある微高地群 11 があり、微高地群 11 を横断して南西の低地部 22 へと続いている。この谷地形については、これまでの発掘調査成果からの検証ができないため、確認ができない。先に分析した五条橋付近の発掘調査成果から考えると、北西側から清須市 12 区に確認された城下町前期以前の自然流路 A タイプの流路跡、清須市 13 区に確認された城下町前期以前の自然流路 B タイプの流路跡があり、五条橋の北側で 97B 区にて確認された城下町前期の NR01、五条橋の南側で 90D 区を中心に確認された 15 世紀後葉以前にあった IV NR4001 があることから、発掘調査で確認された自然流路は後期清洲城本丸跡の東・西にある内堀部分を含む地点を流下していた可能性が高い。鬼頭が指摘した谷地形はさらに古い時期のものを反映しているのかもしれない。

3 つ目は明治 17 年以前の人為的開発により谷地形が地籍図の地目に見られる宅地や畑地等に利用されたためと考えられる場合で、清須市新清洲二丁目から上条織部に至る標高 2.0m ～ 2.6m の谷地形がある。この部分は地籍図の低地部 12 の南側、微高地群 23 の南の地点から低地部 12 の凹地が微高地群 12 の上条織部に少しのびるように見える部分にあたるが、地籍図にある微高地群 12 の中には明瞭な凹地状地形は認められない。

次に鬼頭による谷地形の指摘はないが、現在の表層地形において五条川の西岸に清須市新清洲三丁目から南のあま市甚目寺町西今宿にのびる標高 2.0m ～ 2.4m の等高線であられる谷地形がある。地籍図にみられる低地部 23 に概ね対応し、南西側で微高地群 12 が西に狭くなる部分にあたる。先に地籍図の分析で述べた『古城絵図』に対応する旧五条川の流路痕跡と考え

られるものである。

その他に鬼頭により指摘された谷地形は低地部と対応しており、古い時代の旧流路の痕跡である可能性があるものである。

(2) 地図上にあらわれない旧河道

最後に現在の表層地形と地籍図にもあらわれない旧河道がある。先に述べた発掘調査による 10B 区から 11A 区にかけて確認された自然流路 A タイプの流路痕である。これは下部に中粒砂が堆積するもので、その地点が埋没して微高地化した後に城下町前期以後の遺構が展開した。この流路痕は地籍図に見られる微高地群 20b の中央付近を南北に縦断する可能性がある。また 00B 区の南側に確認された 14 世紀頃の自然流路 C タイプの流路痕も現在の表層地形と地籍図の中にある低地部にもあらわれないものであり、この旧河道を埋積して砂粒の方向が現五条川の流路に向かっており、現五条川の流路が中世にさかのぼって存在したことを示すのであろうか。これら、地図上で推定できない旧河道の究明は今後の調査と研究の進展を待ちたい。

(3) 清須を流れていた旧河道

以上の分析から、清須に流れていた旧河川の推定を行う (図 5)。

弥生時代～古墳時代の旧河川として五条川流域では地籍図から解析した地形 1 に伴う低地部 2・1、地形 3 に伴う低地部 4・5、地形 4 に伴う低地部 4 があり、朝日遺跡谷 A である地形 12 に伴う低地部 13、その下流となる低地部 16 などがあげられる。

古墳時代～古代の旧河川は、五条川流域では地籍図から解析した地形 1 に伴う低地部 2・1 が稲沢市丹陽町五日市場の東側を南に流下する旧河道跡と対応する可能性がある。また地形 5 に伴う低地部 6 も古代にさかのぼる流路痕である可能性がある。他には朝日遺跡谷 B に対応する地形 12 や地形 13 に伴う低地部 2・1a・17 があげられる。

古代～戦国時代の旧河川は、五条川流域では先に述べた地形 5 に伴う低地部 6、地形 16 に伴う低地部 20・22 がある。この流路痕は清洲城跡の北にて南東に枝分かれして、現五条川と合流する流路になる可能性がある。また小規模

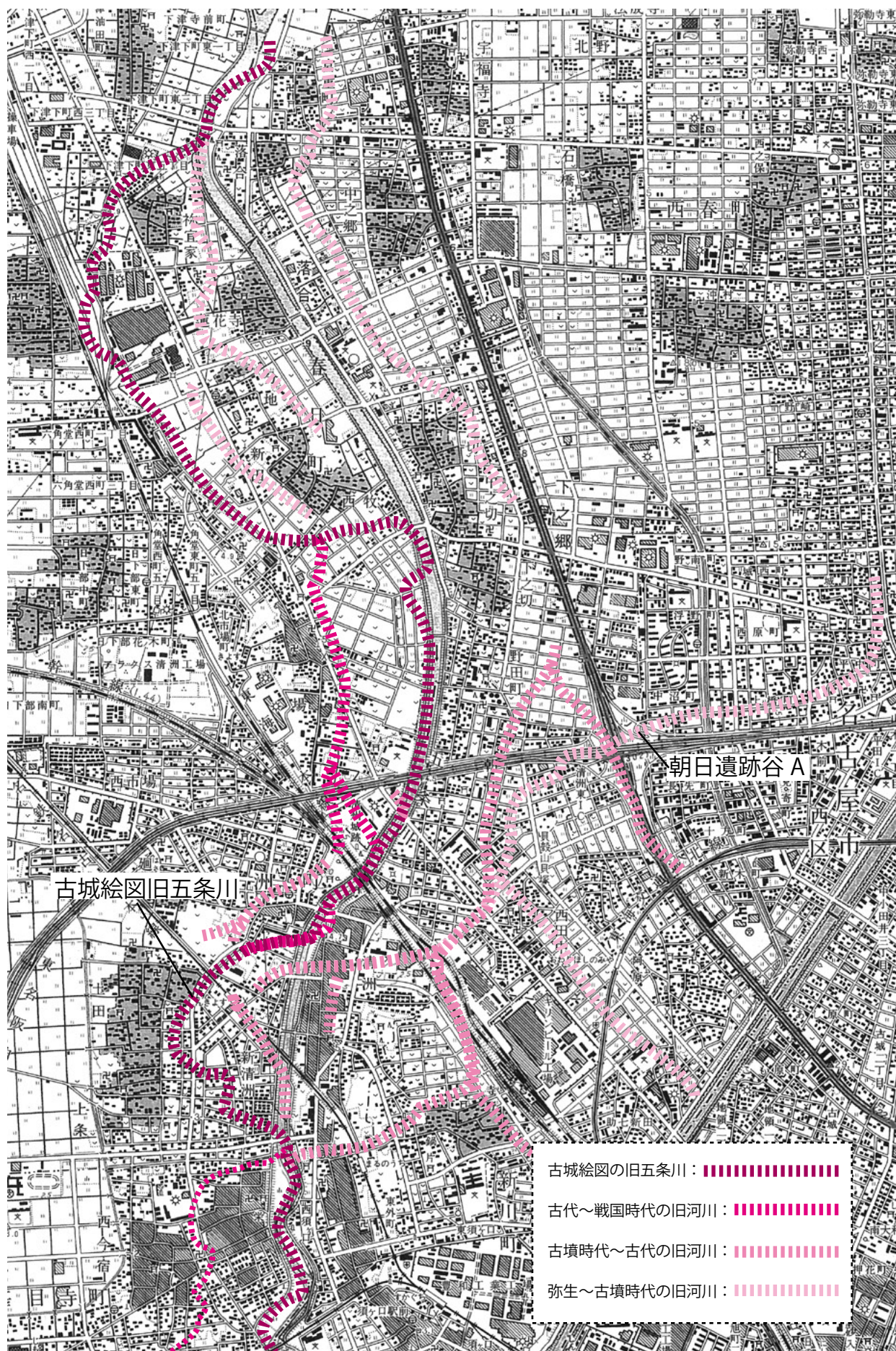


図5 清須の旧河川想定図 (約 1:50,000)

な旧河川の痕跡として地籍図上に水田が続いて带状に見える地点が、あま市甚目寺町西今宿の北東側端部の五条川流域から南西方向にみられる。この流路痕は萱津宿の加藤氏の分析により指摘された旧流路 B にあたり、『富田荘絵図』に見られる旧庄内川の南西方向に流れる流路より新しいものと考えられる流路につながる可能性が高い。

織豊期～江戸時代の旧河川は『古城絵図』に描かれた「清須川」に相当する地形 5・18 に伴う低地部 6、地形 17 に伴う低地部 23・25 があげられる。

以上の分析を現代の地図上に表したものが図

5 である。現五条川流域地域の旧河道の変遷を考えると、古代以前には比較的異なる流れをもつ旧河川が確認されているが、中世以後は江戸時代の『古城絵図』に比較的近い流路に固定されていく状況がみられる。

謝辞

本論を作成するにあたり、清須市教育委員会の柴垣哲彦氏、国際文化財株式会社、小澤一弘氏、鬼頭剛氏には多くのご教示を頂いた。またナカシャクリエイテブ株式会社には地籍図の作成にあたり、ご助力を頂いた。記して感謝の意としたい。

参考文献

- 中・近世研究部会 2004 「尾張国富田荘の考古学的研究—成願寺を中心として—」『研究紀要』第 5 号、(財) 愛知県教育サービスセンター 愛知県埋蔵文化財センター
- 加藤博紀 2006 「地籍図・史料から見た中世の甚目寺町」『愛知県埋蔵文化財センター設立 20 周年記念論集 研究紀要』第 7 号、(財) 愛知県教育・スポーツ振興財団 愛知県埋蔵文化財センター
- 陰山誠一・加藤博紀・鬼頭剛・鈴木正貴・松田訓 2007 「中世萱津を考える」『研究紀要』第 8 号、(財) 愛知県教育・スポーツ振興財団 愛知県埋蔵文化財センター
- 鬼頭 剛 2013 「清洲城下町遺跡周辺の地形解析と五条川の流路について」『清洲城下町遺跡 XI』愛知県埋蔵文化財センター調査報告書第 183 集、(公財) 愛知県教育・スポーツ振興財団 愛知県埋蔵文化財センター
- 金森康明・天野暢保 1998 「愛知県神門遺跡の人面文土器について」『考古学フォーラム』10、考古学フォーラム
- 鈴木正貴編 1990 『清洲城下町遺跡』愛知県埋蔵文化財センター調査報告書第 17 集
- 小澤一弘編 1992 『清洲城下町遺跡 II』愛知県埋蔵文化財センター調査報告書第 27 集
- 鈴木正貴他編 1994a 『清洲城下町遺跡 III・外町遺跡』愛知県埋蔵文化財センター調査報告書第 50 集
- 鈴木正貴編 1994b 『清洲城下町遺跡 IV』愛知県埋蔵文化財センター調査報告書第 53 集
- 鈴木正貴編 1997 『清洲城下町遺跡 VII』愛知県埋蔵文化財センター調査報告書第 70 集
- 陰山誠一 2001 「清洲城下町遺跡」『平成 12 年度愛知県埋蔵文化財センター年報』
- 宮腰健司・鈴木正貴編 2002 『清洲城下町遺跡 VIII』愛知県埋蔵文化財センター調査報告書第 99 集
- 早野浩二編 2005 『清洲城下町遺跡 IX』愛知県埋蔵文化財センター調査報告書第 131 集
- 鈴木正貴編 2013 『清洲城下町遺跡 XI』愛知県埋蔵文化財センター調査報告書第 183 集
- 野口哲也編 1990 『清洲城下町遺跡 II—(仮称) 清洲ふるさとのやかた建設に伴う事前調査の概要—』清洲町埋蔵文化財調査報告 II
- 柴垣哲彦編 2002 『清洲城下町遺跡 III—(仮称) 総合福祉センター建設に伴う発掘調査報告—』清洲町埋蔵文化財調査報告 III
- 石松直他 2007 『清洲城下町遺跡 I—清洲小学校プール建設に係る発掘調査報告—』清須市埋蔵文化財調査報告 I
- 桐山秀穂他 2009 『清洲城下町遺跡 II—清洲小学校体育館建設に係る発掘調査報告—』清須市埋蔵文化財調査報告 II
- 寛和也他 2012 『清洲城下町遺跡 III—清須市一場地内道路建設に伴う発掘調査報告—』清須市埋蔵文化財調査報告 III
- 鬼頭剛 2012 「清洲城下町遺跡の地下層序と表層地形解析」『清洲城下町遺跡 III—清須市一場地内道路建設に伴う発掘調査報告—』清須市埋蔵文化財調査報告 III
- 石黒立人編 1991 『朝日遺跡 I』愛知県埋蔵文化財センター調査報告書第 30 集
- 陰山誠一編 2007 『朝日遺跡 VII』愛知県埋蔵文化財センター調査報告書第 138 集